

「アルス・ロンガ・ビタ・ブレビス」(医術はとこしえなり。されど人生は短し。)

医学校などで唱和される、「ヒポクラテスの誓い」の言葉です。ヒポクラテスは古代ギリシアで「医聖」と称され、医学は「メディカル・アート」として、哲学・歴史・文芸と並ぶ重要な学芸でした。哲学者で有名なピタゴラスやアリストテレスも、同時に医師としても活躍していますよ。

人間が生きていく限り、病いと闘いは宿命で、それゆえ、医学・医術の歴史は古いものです。余談にはなりますが、「文明のあるところ疾病もまた在り」でしたね。古代エジプトのナイル川は洪水のたびに土壌を豊かにしましたが、同時に上流から病原菌(風土病)も運んで来たそうです。エジプトで医学が栄えたというのも、これもまた「ナイルの賜物」だったというわけです。

さて、日本の医学の起源となると、<sup>おおくにぬしのみこと</sup>大國主命が因幡の白兔を助けたという出雲神話かも知れません。彼は<sup>すくひこなのみこと</sup>少彦名命と一緒に国を治め、人や家畜の病気治療の方法を定めています。この神話は信仰も篤く、全国にある医学ゆかりの神社においては、まずこの二神を祀っています。京都の五條天満宮(下京区西洞院通松原)、大阪・道修町薬問屋街の少彦名神社が有名です。

### 仏教伝来と医学

仏教が日本にもたらしたものは量りしれないほどに大きいのですが、医学の面からも見逃すことができません。右は、仏教僧に課せられた必修科目ですが、思い当たる点もありますね。

有名なところでは、**聖徳太子**、**鑑真**、**道鏡**、そして**栄西**などの名を挙げることができます。

聖徳太子は難波に四天王寺を建立しますが、寺域内に**四個院**(施薬院・寮病院・悲田院・敬田院)を設け、貧民や病人の救済に当たりました。鑑真は天台宗にかかわる仏教經典や戒律の他にも、多くの薬種を招来しており、東大寺正倉院の御物(宝物)として、装身具・衣服や調度品、楽器などと共に保管されています。道鏡は孝謙天皇の病気治療に献身したことで寵愛を受けましたが、彼が看護僧であったから出来たことなのです。最後の栄西は『喫茶養生記』を著すなど、お茶を薬として勧めたのはよく知られるところです。

#### 【<sup>ごみょう</sup>仏教教義の五明】

- <sup>ない</sup>内 明……仏教学
- <sup>いん</sup>因 明……論理学
- <sup>しょう</sup>声 明……仏教音学
- <sup>こうこう</sup>工巧 明……造寺・造仏、絵画、土木工学
- <sup>いほう</sup>医方明……医学、薬学、看護学

### 国風医学のさきがけ 『医心方』

古代日本においては疫病の流行は悪霊のしわざと考えられ、治療法といえば加持祈祷、つまり呪術的な「まじない」が行われました。また陰陽五行説に基く中国医学の影響により、**薬石**(鉱物や植物の草根木皮)が重宝され、治療薬と解毒剤の双方が服用されます。疾病治療には勿論ですが、一方では中毒症への対処も必要で、さらには毒殺に対する防御という目的もあったそうです。

重鎮の中国医学を、いわば国風医学に変えたのが**丹波康頼**(<sup>くすりのかみ</sup>典薬頭=朝廷の医療長官)です。彼は医学書『**医心方**』(30巻、982年編集)を円融天皇に献上しますが、中国書の引き写しではなく、彼独自の解釈——中国固有の風土病は排除、鍼灸療法を独立して取上げるなど——を加えて完成しています。医学原論・倫理・外科・内科・婦人科・小児科・養生など、ほぼ全域を網羅していますよ。性生活などは、今日から見ればたわいなくも思えますが、その妙味?を原文でご覧下さい。

「令女伏臥而展足男居股内屈其足両手抱女項従後内玉茎入玉門」

# 山脇東洋

(やまわき とうよう : 1705~1762) 丹波亀山(現・亀岡市)生れ

京都の医官・山脇玄脩の養子

六角獄舎というのは文字通り監獄です。宝暦4年閏2月7日(1754年3月30日)のこと、この敷地内で、処刑済の屈嘉(38歳男性)の日本で最初の人体解剖が行われたのです。立会ったのは山脇東洋、原松庵、伊藤友信、小松玄適、及び浅沼佐盈の5名で、解剖図を描いた浅沼以外は全員医者です。東洋らは解剖記録『臓誌』(1759年)も残しています。

これらは、杉田玄白や前野良沢が解剖の見学(1771年)をして、翻訳書『解体新書』の刊行(1774年)をした頃よりも、約20年近く

早い時期に行われているのですよ。いかに画期的な功績であるか、お分かりいただけるでしょう。

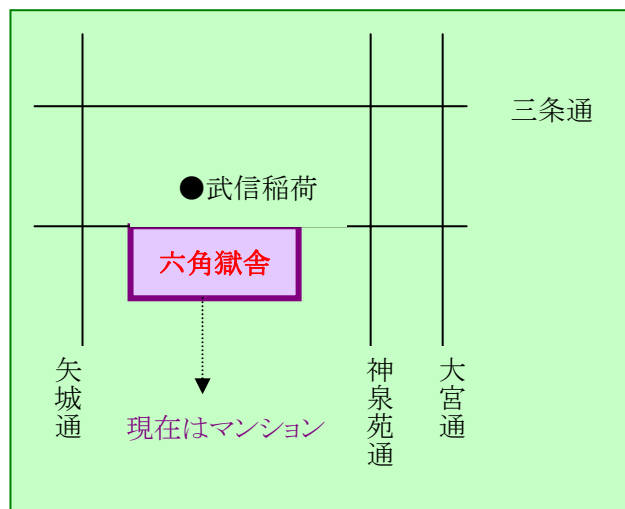
当時は、仏教あるいは儒教の教えによって、罪人の亡骸とはいえ、身を切り刻むような行為は罪悪視されていた時代です。実際、杉田玄白らも外国人の執刀を見学するのが関の山でしたし、ドイツ解剖学のオランダ語翻訳書『ターヘル・アナトミア』を和訳するに留まっただけでした。東洋自身も、それ以前といえば師匠から「人体と似ているといわれるカワソウで研究しなさい」と言われていたのですよ。もっとも、東洋が納得しなかったことは言うまでもありません。

この快挙に関しては、時の京都所司代であった酒井忠用(小浜藩主)の存在も忘れてはなりません。上記のような時代にもかかわらず医学の未来を認めたのでしょう、解剖許可を出したわけですから。そういえば、東洋以外の原松庵、伊藤、小松の3名は小浜藩の医師ですね。おそらく、彼らからも懸命な陳情(解剖許可願い)が出たと思います。ついでに言えば、玄白も小浜藩医の息子です。

さて、別の意味で貢献者と言え、検体となった屈嘉の存在が重要です。何の因果か、世に名前を残すことになりました。しかし東洋らも立派だと思えるのは、きちんと供養を行なっていることで、罪人とはいえ、命を粗末にはしておりませんね。今日営まれる解剖体慰霊祭こうしの嚆矢です。尚、供養碑は山脇家菩提寺である誓願寺(新京極三条)にあり、屈嘉を含む14名(うち4名は女性)の戒名が刻まれています。屈嘉の戒名は「利剣夢覚信士」で、東洋は次のように追悼しています。

「屈嘉は不良の徒であったが、吾が道にあっては大勲あり、我等の長い間の蒙を頓に覚してくれた。故に夢覚と号す。吾が道が続く限り、子の功は日月と争い骨は朽ちるとも功は朽ちないであろう。」

余談ながら、六角獄舎では、幕末期に平野国臣と古高俊太郎が収監され、亡くなっています。平野は二つの事件で有名です。僧・月照と西郷吉之助(後の隆盛)の入水の際に同船していたこと、もう一つは、生野銀山での挙兵(生野の変)です。一方の古高は、新選組に捕縛されて暴挙計画を自白したこと(池田屋事件)で知られています。二人は、禁門の変による大火が獄舎に迫った時に、縄を解かれることなく、あわれ斬首となったわけです。六角獄舎の跡は、今日ではマンションの敷地内にあり、石碑と駒札、そして医師会の記念碑「日本初の解剖の地」が建てられています。



# 医学の近代化

聖徳太子、丹波康頼、山脇東洋らを見ていますと、「医は仁術なり」という言い古された言葉を思い出します。医師が僧侶であったり、学者であったことも大きく影響していますが、人の病や生命を預かる立場の者として、かなり高い倫理観を持っていたように思います。

さて、西洋の近代医学は明治以前にも、主にオランダを通して日本に伝わりました。蘭方医といえば、それは即ち、世の最先端を行く者の代名詞でした。シーボルトなどはことに著名です。この時代の医学に関して非常に顕著な点は、外科治療の発達ですね。何故そうなのかと言えば、残念ながら戦争が度重なり、傷病兵が多かったことが大きな要因です。冒頭に、文明の起こる所に病在り、と申しましたが、「戦争のある所また病在り」でもあったのです。

日本でも、戊辰戦争の時に西洋外科治療のすごさが認められました。というのは、それまでの刀傷の治療法では銃による傷が治せなかったからです。西郷隆盛は英国公使館の医官ウィルスに急ぎ招聘したほどです。尚、京都初の近代病院と呼べるものが、この時に相国寺や御所内に設置されます。設備は野戦病院並みでしたが、明治天皇がその存在を知られ、西洋医学導入の条文を発表(慶応4年3月8日)されるに至ります。「五箇条御誓文」より6日も前のことです。

明治期の京都では殖産興業が大命題でしたが、近代病院設立への動きは「寮病院」開業となって結実します。思い出して下さい、この名称。あの聖徳太子が設けた四箇院の一つと同じですね。実は、時同じくして吹き荒れた廃仏毀釈のために存亡の危機に立たされた仏教界が、存在意義を回復せんがために京都府の施策に全面協力したわけで、名称は彼らのたつての願いだったのです。聖徳太子の設立は593年、今回は明治5年(1872)ですから、言わば1,300年振りの再現でした。

当時の仏教界の一人に願成寺の住職・与謝野礼巖がいますが、かの与謝野鉄幹の父であります。医学界を代表したのは新宮涼庭、彼の書齋や医学塾が南禅寺前の順正書院として残っています。また、主導者の明石<sup>ひろあきら</sup>博高(京都府職員、蘭方医)と共に推進した人物が山本覚馬(京都府顧問)で、同志社英学校を新島襄と一緒に創立した人物です。余談ながら、同志社は後年(1886年)になって同志社病院と京都看病婦学校とを設立・開業するなど、京都医学史でも特筆すべき存在ですよ。

さて、寮病院は紆余曲折の末に京都府立病院、そして現在の京都府立医科大学附属病院として存続しています。設立の経緯が非常に特異な状況だったものですから、京都府民から寄せられる期待や信頼は、他の官立病院とは異なって、とても篤く親密なものであったようです。医学とか医師・病院というものが何のためにあるのか、大切なヒントがあるような気がします。

Medicine is a benevolent art. (医は仁術である。)

1979年、WHO(世界保健機関)は天然痘絶滅宣言を発表しました。およそ伝染病の絶滅宣言は人類史上初の出来事です。快挙として喜ぶべきことでしょう。しかるに、WHOからの勧告にもかかわらず、米国とロシアの2国は、いまだに天然痘ウイルスを破棄せずに保有しております。理由は、戦争やテロで生物兵器として攻撃された時にワクチン作りに必要だ、というものです。例の9・11テロ事件や炭疽菌事件によって、廃棄勧告は事実上無期延期となりましたが、医学あるいは薬学が、戦争との結び付きが極めて深いことをあらためて思い知らされます。